

## アイヌ語復興に関わる諸問題 — 石狩川筋の場合 —

8月4日(木) 13:30~15:00 東京会場  
 10月16日(土) 15:10~16:40 苫小牧会場

講師 太田カムソッカイ満 旭川アイヌ語教室講師

Irancarapte  
 ku=kon-nispa utra katkemat utar  
 tan an to otta unukar=an ike sonno ka  
 ku=ekiroroan kor eoripak kewtum  
 ku-yaykorpore wa es=erankarap=an  
 hawe tapan na  
 kuani anakne Yurapukur sanike  
 ku=ne i ne wa Sorapci petcam ta  
 siko wa sukup pe  
 ku=ne i ne wa Ota Micuru  
 sekon-ree an pe ku=ne ruwe tapan na

紹介の前にいきなり始めてしまいました。皆さんこんにちはという時に、「イランカラッテ」という言葉がいたるところで使われていますが、「イランカラッテ」という言葉は、地域によって差はあるのでしょうか、石狩川沿いでは、男の人が正式なあいさつをする時に使う言葉です。

私のはじめのあいさつのように節をつけてとうとうとあいさつをする時に、その冒頭で使う言葉です。そのため、私は今、ラジオ講座の講師をしています。そこでは「イランカラッテ」ではなくて、「トーテッ ノ エソカイ ルウェ (皆さんお元気ですか)」という言葉をはじまりのあいさつにしています。

今日は、アイヌ語復興に関わる諸問題ということで、石狩川筋のことについてお話をしたいと思います。皆さん、石狩鍋とかそういうので石狩川、あるいは札幌についてはご存知だと思いますが、なかなか石狩川筋のアイヌあるいはアイヌ語とはどんなものなのか、専門家でもなかなかつかめていないというところがありますので、まず、この石狩川筋にいたアイヌについて、あるいはそこで話されていたアイヌ語についてお話をしておきたいと思います。

受付で北海道の地図をお渡ししましたが、それを見ると、石狩川は、石狩支庁、空知支庁、そして上川支庁と3つの地域を通して流れている非常に長い川だということがお分かりいただけだと思います。非常に長い川ですから、そこに暮らすアイヌの人々の暮らしというのも、非常に多様であったということです。

この石狩川筋のアイヌといえば、皆さんは旭川のアイヌを思い浮かべるのではないかと思います。実際に旭川に行ったという方もいると思います。

先ほど紹介にもありましたが、私は旭川のアイヌ語教室

で講師をしています。今年から空知の滝川市でもアイヌ語教室を始めました。

アイヌ語の研究あるいは記録が学者によって行われた地域は、非常に限られた地域、それも特に道南の地域が多かったため、たくさんの方言があったにもかかわらず日高や千歳、登別以外の地域の言葉はあまり一般的に知られていません。

道東の釧路や旭川は中部北部方言ということに一応分類されていて、旭川についてはかなりの資料があります。本としても刊行されているので、少しは見ることもできます。ところが、現在までテキストや辞書が出ていません。アイヌ語を学ぶには非常に不完全であるというのが現状で、旭川の方言は一般には余りよく知られていません。

アイヌ語は方言がたくさんあっても、基本的に一緒なのでないかと言われますが、同じ言葉でも意味が全く逆になる言葉があります。「アット」と「ルアンベ」という言葉の例では、日高の方では「アット」といったら普通の雨、「ルアンベ」といったら嵐ですが、旭川では「ルアンベ」が普通の雨で、「アット」といったら大雨、嵐です。という具合に、意味が逆転するものが結構あります。

民族衣装でも、日高地方の人が普通に着ている「カバラミツ」は、昔の旭川では生きている人の着るものではなく、葬儀の衣装であると認識されていました。また、アイヌの昔話に「オキクルミ」と「サマイクル」というのがあります。これは日高の方へ行くと、物語の中でも「オキクルミ」が偉い神様で、「サマイクル」の方は、2番手かあるいは逆に何か失敗をしてしまうような役になる。ところが、我々の地域にいくと、「サマイクル」が1番で、「オキクルミ」というのは、失敗する役か、悪い役かどちらかということで、そのようなところでも非常に同じ言葉を使っているが、通じるようで通じないのが南と北です。

さて、石狩川沿いについてですが、非常に広大な地域なので大きく3つあるいは4つのグループに分けられます。下流の方から行くと、石狩市、当別町の河口から新篠津村のあたりまでを石狩アイヌ、滝川から富良野に向けて空知川が延びていますが、この辺には樺太のアイヌが住んでいました。そこから旭川の手前の神居古潭までが空知アイヌ、そして神居古潭から上流が旭川アイヌ、上川アイヌの住んでいたところと分けられます。

石狩や樺太について記録が残されないうちに、住んでいた人が散り散りになってしまったためによく分かりません。

空知地方、特に滝川市、新十津川町、そして深川市、雨竜町あたりのいわゆる石狩川の中流域、そして神居古潭から上の旭川については知ることができます。

明治政府により北海道の開拓が始まった時に、空知地域は石炭が多く採れたことから、開拓が早い時期に行われ多くの人植者も流入したため、そこに住んでいたアイヌはそれまでの生活を変えることを余儀なくされ、住むところを失った者は下流の岩見沢や上流の旭川に移り住みました。

現在、旭川でアイヌ語やアイヌ文化を学ぼうとすると非常にわかりづらい思いをするはずで、「人によっていう事が違うじゃないか」という声もよく聞きます。その原因は何かというと、昔から旭川にいた人が固まって住んでいればよかったのですけれども、現在、旭川であれほどアイヌが固まって住んでいるのは、自然に住んだわけではなく、開拓によって追われた人や、旭川の方で有名なクウチンコルに率いられて、自発的に住んだということがあります。広大な地域の人たちが狭い地域に集まって住んだために、地域によって少しずつ違う文化、あるいは言葉が一緒たになってしまったせいで、表面的に見る分には問題ないのですが、深く勉強しようとするとき非常に矛盾することができます。これは、もともと広い地域にいた頃には、お互いにどのようなやり方をしていようが問題なかったものが、一つの地域に集まって住んだために起こった現象です。

これまで、こういったことはあまり言わないできました。特に旭川ではアイヌのことにに関して、観光資源という側面もあり、そこにことさら異を唱えて、これはどこそこの地域である、これはどこそこの地域だと、わざわざ旭川市や上川地域から外の地域に範囲を広げて物事を考えることをしませんでした。ただし、その区別は厳然として残っていて、アイヌの中では、それはこの地方の言い方ではない、空知の言い方だとか、どこそこの人間はもともとこの地方の人間ではないというような話があったりします。

言葉を復興させようとした場合に、このことにふたをして、先に進むわけにはいきません。そこで、このように背景にあるものを掘り出している状態です。一方で「昔の対立をおまえは表面化する気か」とか、「もう何十年もたって、そんなことも言う年寄りもいなくなって、だれももう知らなくなっているのだからいいじゃないか」という意見もあります。しかし、私は非常に大事なことだと思っています。

神居古潭というところは、皆さん観光で行かれておわかりだと思いますが、非常に険しいところです。昔から天然の要害で、アイヌもめったなことでは神居古潭を通らない。少し遠回りでも雨竜川の方からぐるっと山越えをして行き来をしていました。こういうことを調べ始めて、わかったことの一つは、旭川のももとの要素というのは、もともと旭川に住んでいた人もいるし、江戸時代の場所請負制度で、浜辺で酷使されていた人が山の中に逃げ込んで来た、あるいは病気のはやった村を捨てて移り住んできた人がいたなど、旭川には北とか東の要素が含まれています。

それに対して空知は、いろいろと掘り下げると、意外に驚くのは日高、日高というより千歳、つまり、南の方

のアイヌ語と非常に近く、文化的にも非常に近いもので、婚姻関係でも交流があったということがわかってきました。

そういったことで、旭川あるいは石狩川筋のアイヌ語をこれから考察するとき非常に矛盾する要素を抱えながらやらなければならないので困ったなと思っています。北と南と一緒にしたような言葉をどのようにさばいて、標準語化していくか、言葉の復興に当たって、研究者は、それぞれこの家ではこういう言葉を使い、この家ではこういう言葉を使うということで、1つの言葉について幾つか単語を覚えてもいいでしょうけれど、一般の学習者にとってそれは大変な負担です。そういうわけにはいきませんので、例えば「行く」という単語には「オマン」という1つの単語というぐあいに、多くて2つぐらいに単語を絞り込まなければならない。1つの言葉に対して10もアイヌ語の単語があったらまずいわけです。覚え切れないですし、使いようもないということで、今それを解きほぐす作業をしています。まだまだ、標準語化というところまではいっていないところがあります。

これまで、旭川のアイヌ語教室では杉村キナラブックさんの「オйна」とか「ユカッ」を録音した音声資料を聞きながら勉強してきました。杉村キナラブックさんは、空知の雨竜生まれ、そして深川市で育ち、旭川に嫁いだ人です。言葉も嫁ぎ先の言葉に合わせ空知の言葉遣いをしないように努めていたようです。ただ、物語を語る時には、やはり旭川言葉に直しきれなくて、空知の言葉遣いをしています。これに対して、旭川ではもう1つ川村家の出である砂澤クラさんの音声資料があります。この2つの資料を扱う場合に非常に困ったことになっています。砂澤さんの音声で勉強する場合には、キナラブックさんの音声で勉強したことを1度塗り替えなければならないのです。そうしなければ「えっ、今までこれ勉強してきたのに、この言い方間違っているの?」「いや、間違いじゃないんだよ、これはこっちの旭川の方ではこうなんだよ」ということになってしまいます。そういったことを乗り越えて標準語というものを確立したいと思っていますが、一足飛びにはいきません。誰か1人の言った言葉を、例えば砂沢クラさんかキナラブックさんの言葉を標準語化して、「じゃあ皆さん、この言葉遣いでいきましょう」と言って済むのであれば、これほど簡単なことはありません。実際にはどの家にも自分のおじいちゃんやおばあちゃん言葉というのが残っていて、越したことはないで、誰かの言葉遣いを「これが標準語です」と言うとき、誰かが嫌な顔をする、気を曲げるということではまずいので、毎回苦慮をしています。現在のところ、みんなで勉強するときには、両方とも間違いではなくて、これは空知の言い回し、これは旭川の言い回しというような言い方をして、誰かのメンツとか、誰かの子孫のメンツも潰さないような形をとっていますが、一般の学習者にとっては非常に困ったことです。

そういう課題を抱えています。将来的には標準語をつくってほしいと思っています。現在、財団の助成金を活用して辞書を編集しています。今年が3年目で成果をださ

なければならぬ期限ですから、来年には辞書を出さなければなりません。もちろん標準語化どころではありません。もし、来年その辞書を見る機会があったとしたら、「何じゃこれは」と思うと思います。というのは、1つの言葉に対して1語というのがありますが、中には1つの言葉に対して3つも4つも同じ言葉があるというものがあります。同じ言葉というか、アイヌ語としては違った言葉なのですが、それぞれ話者が違っているため違う言い方になっています。今のところは集められる限りの言葉を集めていますので、さまざまなバリエーションがあります同じ言葉を使っても意味が微妙にずれています。とりあえず、それをどうこういじらないで、まず、出してしまおうと思っています。

言葉の採集は、テープや文献からも行っていますが、旭川にはありがたいことに学者さんがとった資料だけではなく、アイヌ自身の手による録音も残されています。小沢カンシャクが初めて録音機を買って、自分たちの歌や物語を録音したテープがあります。また、手帳に手記でアイヌの言葉などを書き残してくれました。そういうものが辞書を編集する上で非常に助けになっています。

また、現代のアイヌ語を集めました。文法的には非常にくずれています。しかし、それは根強くアイヌ語として生き残っていたものです。今でも旭川近くに住むアイヌがアイヌ同士で話をする時には、日本語で話す会話の中にアイヌ語の単語を交えて話をしています。そういうアイヌ語もたくさん収録しています。こういう言葉をいかに生かしていくかということです。

言葉の収録と同時にもう1つ大事なものは、新語をつくるという作業です。新しい言葉、今の生活の中で、アイヌ語で会話をしようとしても、「きのう、テレビで何見た？」と言うような場合、まず「テレビ」をなんと言うかということから困るわけです。そこで、「テレビ」という言葉が必要になるし、「電話」とか、「携帯」とか、そういうものがいちいち必要になってきます。そこで、少しずつではありますが、新しい言葉をつくろうとしています。ただし、勝手に言葉をつくってそれを押しつけるというのではなく、旭川ではアイヌ語教室で、みんなが案を出して、検討して、言葉をつくってそれを使っていくという手順を踏んでいます。そのため、今つくっている辞書の中にも多少は納めていますが、あまり多くの言葉は入っていません。手続きに時間がかかるため、新語づくりはあまり進んでいないという状況です。

旭川のアイヌ語教室に訪ねて来られる方や、出会った方には、いい言葉、いろいろなアイデアがあったらどしどし旭川アイヌ語教室に送って欲しいとお願いしています。ただし旭川ではアイヌ語教室が2つありますので、川村カ子トアイヌ記念館の方に送ってください。

そうしていただければ、みんなで協議をして、採用されれば辞書の方に載せていくことをしていきます。毎年とはいきませんが、何年かごとに辞書を出していきたいと考えています。辞書の中では新語をつくった人の功績をたたえるためと、言葉をつくったことの責任をもってもらう意味もあり、新語には全て何々市の何々と名前を載せて

います。誰がつくった言葉かを忘れられるくらい話されるまでは名前付きでずっと辞書に載っていくと思います。それともいづれは、誰もが知っている言葉だから、もう名前を消してもいいだろうということになるのかも知れませんが、現時点ではそういうことにしようというのが旭川のアイヌ語教室で決めたことです。

そういった形でも、言葉の整備を進めています。日常の中で話をするという場合には非常に困難が伴います。私も常に思っていることですが、せっかくアイヌ語を覚えても誰と話しをするのかという事です。今日ここで、アイヌ語の復興という話をしてはいますが、アイヌ語で話しても誰も分かってくれないので嫌になることがあります。私がアイヌ語を学んだ時には、まだ、アイヌ語の話しを分かる人がいましたので、アイヌ語を続けられたということがあります。

私の家は商売をしていたので、小さい頃はじいさん、ばあさんと暮らしていました。そのためか、お年寄りの話を聞くのが好きで、そんな中でじいさんから最初にアイヌ語を聞きました。しかし、じいさんのアイヌ語といっても、じいさんはもうほとんど忘れていましたし、じいさん自身はアイヌ語を話したくなかった、子供にも孫にも教えたくなかったようです。

じいさんはロシアにいたことがあって、ロシア人と非常に仲がよかったようです。そのため死ぬまでに機会があったロシアに帰りたいと言っていました。じいさんはロシア革命の頃に、きこりをやっていたひいじいさんに連れられてロシアに行ったそうですが、ひいじいさんから「帰るぞ」と言われた時には「帰りたくない、ロシアに残る」と言うくらいロシアが気に入っていました。しかし、「おまえ1人置いていくわけにいかないから」ということで日本へ引き上げてきたそうです。そんな感じで私は小さいころ、じいさんからアイヌ語は学びませんでした。ロシア語は学びました。

今もロシア語の通訳として働いているのは、じいさんから「ロシアはいい」とか、「ロシアに帰りたい」と、そんなことでロシア語をびっちり教えられ、「これからはロシア語だ、おまえもロシア語をやれ」と言われてロシア語を身につけました。私のじいさんは、ものを考える時、半分はロシア語ということになります。アイヌ語についてはやっとならなくて、「何ていったかなあ、こうだったかな、ああだったかな」という程度で単語を思い出していくというくらいでしたが、それが一番最初のアイヌ語です。それ以降には皆さんも本などで読まれたことがあると思いますが、織田ステノフチとか、葛野エカシ、白沢ナベフチという方がいらっしゃいましたが、私は会って、お話や物語を聞かせてもらいました。旭川でずっとおつき合ひさせていただいたのは、清水キクエというおばさんでした。

今着ているこの服は体に合っていないのですが、そのおばあさんの形見だからです。2年前に95歳で亡くなりました。アイヌ語は話せませんでしたが、知里幸恵を知る世代です。もちろんアイヌ語を聞いて育った世代です。そのためアイヌ語で話されることはわかります。ですから、その

おばあちゃんの所へ行って話をすれば、私の話すアイヌ語の間違いがあればそれを教えてくれました。今から考えると残念なのですが、私には音声資料を録ろうという考えがなかったため資料が残っていません。

生まれて初めてユカラを聞いたのは、大学生の時に織田ステノさんのところへ行って、語ってもらった時です。その時にも全くテープに録ろうとか、それを言語資料にしようという気持ちは全然なかったもので、語ってもらうのをそのまま聞いて、ちょっとだけわかったと言うような、ぜいたくなことをしていました。

それは、2年前も同じで、何年間も清水キクエさんの病院に行って話をしているのに、録音もせずに、ただ単に自分の覚えた物語を聞いてもらい、「これはどうだった、あれはああだった」と聞くだけでした。私の人生で最初に録音をしようと思ったのは、清水キクエさんというおばあさんが亡くなる1週間前でした。何か録音すると学者みたいで嫌だったので、すごく抵抗があったのですが、勇気を振り起こしてテープを持って行きました。その日は、とても具合悪そうだったのですが、「もっとある、もっとある」と次から次と話してくれました。そうしているうちに顔色が変わってきて、看護婦さんが止めに入ったのですが、少しだけ休んで「休んだからもう大丈夫だ」と言ってテープにいろいろなことを吹き込んでくれました。そのおばあさんが死んでからは、アイヌ語を話しても張り合いがない日々を送っていました。

1年前に樺太アイヌの子孫で北原次郎太さんという方と知り合いました。それからは少し張り合いができたというか、この世でも張り合いはあるなと思っています。私が何でアイヌ語を一生懸命勉強しているかというのを正直に言うと、これは大学で「先生は何のためにアイヌ語をやるんですか」と聞かれても言っていないことですが、私はあの世に行ったときのためにやっています。私はあの世へ行ったら、私も知らない高名なエカシやフチたちと話ができるのではないかと考えています。その時に「おまえ何だ、全然言葉を話せないじゃないか」と言われぬように勉強をしています。そういう人たちと一緒にユカラや物語を語って、ウエネウサラするために勉強しているというのが一番の理由です。こんなことを言うと、皆さんは変なことを言っていると思われるかもしれませんが、私は年寄りの中で育ったものですから、そういうものが根づいてしまって、感覚的にはあの世というか、そういうものも信じています。実際に自分の先祖が夢に出てきたことがあります、日本語では話していませんでした。アイヌ語で話していました。それは私が全然アイヌ語をできないときです。その時は、何を話しているかわかりませんでした。後になって、アイヌ語を勉強してから、その時、私の先祖が何を言ったのかが分かりました。そんな不思議な夢や、私はよくチニタレされます。私は夢の中で亡くなった人や、神様にも受けることがあります。そういうものを信じているからこそ、心の支えになるということもあります。

アイヌ語の復興に当たっては、現在、北海道教育大学の旭川校でやっています。そこで若い言語学者の人たちと一

緒にやっています。その中で、彼らは彼らなりにプログラムを立てて、例えば成功した言語の例、「ウエルズ語の復興」というのがありました。そういうものを例にとり、科学的に復興運動をやっているようにしています。それはそれで大事なのですが、先ほども言いましたように心というものを置き去りにしてはいけないと思っています。

ただし、この部分が余り過ぎると、言葉がなくても心さえあればいいということになってしまうので、危険なことは危険です。アイヌの心を大事にしようということは、現在、いろいろなところで言われるところですが、「そんな言葉なんか大事じゃないんだ、カムイノミをするときでも、言葉に出さなくてもいいから心の中で言えばいいんだ」という人もいますが、そこに走ってしまうとみんな言葉をやらなくなります。やはり言葉をやるというのは大変なことです。どんな技術でも、ある程度身につけたら、それ以降は楽なものです、言葉だけはそうはいきません。せっかく、10単語を覚えても、3日も4日やらなかったり、1日でも大酒を飲んだりした翌日などは単語1つ覚えていればせいぜいで、というような悲惨な状況になります。あるいは、せっかく覚えたのに、「旭川地方のアイヌ語を覚えて日高へ行ってみると、それは間違っていると言われた。何かやる気がしなくなった」と言われると、何とも言いえない気持ちになります。

言葉は、毎日毎日やらなければなりません。そのためには、家族ぐるみで学ぶのが一番いいのですが、実際には、アイヌ語教室にしても、近所に住んでる人方が歩いて通うという距離ではなく、かなり遠くの人が通っています。そのため、日常的には顔を合わせられない状態です。そして、アイヌ語教室が2時間半あったとしても、そのうち1時間は、1週間会わない間の事務連絡とか雑談で潰れてしまいます。それもアイヌ語ではなく日本語で話されます。これは問題だと思っています。

そこで、アイヌ語を学ぶのに有益だと思われるのは、日常会話とはかく、1人ででもできるものに口承文芸があります。口承文芸を歌のように身につけて、家で暇な時にでも語ってみて、年に1回でもみんなで集まって、ユカラなどの口承文芸を発表するということを始めました。ウエネウエネウサラということで、去年初めてやりました。

大抵、今あるアイヌの行事では発表時間が5分とか10分とかと決められているため時間に追われて、気ぜわしくて全然楽しくありません。そんな発表を見ていて楽しいのか、見てる人も余り楽しくないのではないかと思います。そこで時間の制限を決めないで、一晩中、寝たい人間は寝ていいし、起きていたい人間起きていればいい、ただし、そこでは基本的にアイヌ語しか使わない、また、参加するには何か一芸、歌でも何でもいいのでアイヌ文化の一芸を持っていなければだめだという基準でやってみました。非常に好評でした。そういうことを続けていきたいと思っていますので、ここにいる皆さんもこれから機会があったら、ぜひとも参加してほしいと思います。

去年は、こちらの方に案内を出さなかったのですが、何回かやってみて内容が固まってきたら案内を出そうと思

ます。ただし、地味な集まりで、交通費も出ませんし、来ても食べ物の飲み物もなく、コンビニで自分で買って、好きな食べ物、好きな飲み物を持ち寄ってみんなでやろうじゃないかというだけのことです。

こういうことを、少しずつ広めていきたいと思いますが、主催者になると気を使っておもしろくないので、何とかことは手放して、他の地域から、こんなことをするから来てねと言って欲しいです。その土台ができるまでは、石狩川筋でやっていきたいと思います。希望があれば、こちらでもお手伝いしますので、「うちらもちょっとやってみたい」という人があれば、ぜひとも声をかけてください。何も、1時間いっぱいアイヌ語でユカヲをしるとは言いません。歌でもいいですし、歌といっても伝統的な歌もさることながら、旭川ではよくやっていることで、これは大学の授業にも取り入れているのですが、日本語の歌をアイヌ語に訳して歌うということです。これは、どこの地域でもやっていると思いますが、旭川でも結構近ごろのアイヌの人たち、おしゃれで歌謡曲を訳してアイヌ語で歌っていました。例えば「大きなのっぽの古時計」、これは好評です。歌によって好評な歌と不評な歌があるのですが、「大きなのっぽの古時計」はきれいに訳せて、非常に好評です。こんな感じです。

ポロ トケイ ケウエリワ オンネッ  
クコロエカシ コロ トケイ、  
アディオタパ ランマ シモイモイケ  
アノドワシ トケイ ネ、  
エカシ シッコ ワ シリベケレ コロ  
イバンホッ トケイネ、

タネ アナッネ ネア トケイ ソモ シモイモイケ

というような形で、アイヌ語教室でも大学でも使っています。特に、大学ではラジオ講座のテキストを土台にして授業をしていますが、授業で学ぶ文法の項目に合うフレーズが出てくる歌を探してみんなで歌うのですが、文法の項目を覚えることが目的にあるために、歌によっては無理なものもありました。例えば「だれだ」というフレーズで歌を探したのですが、私の少ない歌謡曲のレパートリーの中から、この「だれだ」のある歌ということで、この間ガッチャマンの主題歌を歌ってこけました。今の大学生はこの歌を知らないのです。そのため歌いようがないと学生から言われました。それじゃ「だれ」という表現が含まれる歌詞があったら教えてくれと頼みました。そういった形で、例えば命令だったら、命令の文章が含まれた歌。いろいろな歌のフレーズがありますから、それに合わせたものを選んで、アイヌ語に訳してみんなで歌って覚えるというのも1つの手だと思えます。

この前の日曜日にアイヌ語教室に行きましたら、川村家のチビちゃんがやっぱりアイヌ語のかえ歌の1つを覚えて歌っていました。それは「静かな湖畔の森のかけから」というや歌なのですが、

モノアント サムタアン ケナシクリワノ  
ヘンパノ モシモシ カッコク カッコク セ  
カッコー カッコー カッコカッコカッコ

という歌詞です。子供はすごいもので、前々回のアイヌ語教室でこの歌を教えたら、前回にはもう覚えて歌っているのです。このような形で歌で覚えるというのも若い人向けにはいいのではないかなと思います。いきなり、ユカヲとかそういうものになると、節回しは特殊ですし、地味なものです。あまり取っつきいいものではありませんし、1字1句変えてはいけないのではないかなというような抵抗もあり、なかなか飛びつけないと思いますが、それに比べるとこのような歌であれば気軽にできます。間違ったとしてもまわりから何か言われるということもないので、軽い気持ちでできます。これからもこのように歌をどんどん訳して、そのうちカラオケでも全部アイヌ語で歌えるようにしたいと思います。

この石狩川流域のアイヌ語の復興ということに関して最大の困難というのは、人口の少なさです。石狩川流域で札幌と旭川は大都市ですが、空知地区は過疎地帯になっています。炭坑もなくなり、若い人がどんどん出て行ってしまうような過疎地帯なので、全体の人口も少なくアイヌの人口も少ないです。そのため空知地区にはウタリ協会がありません。非常に遅れた地区で、アイヌに対する偏見もまだまだ強い地域です。そういったこともありアイヌであってアイヌであるということの名乗り出る人がいません。1989年の調査では、空知地区のアイヌはゼロということでした。しかし、1999年の調査では、なんと31人に増えました。そんな急に増えたのではなくて、もともといた人がウタリ協会に入会するという形でアイヌであることを表明したというか、知られたということですが、まだまだいます。ただし、アイヌであると言って、嫌な思いをすることはあっても、得をすることは1つもないので、空知ではアイヌ語教室に参加するアイヌはいません。旭川でもアイヌ語教室にはウタリの参加はありません。アイヌの参加は、講師として私と川村兼一さん、そして杉村フサさん以外は、みんな和人ということになります。潜在的に勉強したいというウタリもいると思うのですが、仕事が忙しいなどの理由で参加はありません。

今年から旭川の北海道教育大学でアイヌ語の講義を始めたのですが、その時にびっくりしたことがあります。それまでアイヌ語をやっている時に、「アイヌ語頑張ってよ」とおばさん方から声をかけてもらえると嬉しいのですが、別に言うだけなのにそういった言葉もなく「アイヌ語やってたってね」とか、「うちの子供には英語やらせた方がいいからね」とか、そういう冷や水をかけられることばかり言われてきました。無責任な言葉でも「偉いなあ、頑張れよ」と言ってくれば、落ち込みもなく済むのにと思っていました。そういう中で、大学で教えるようになってから、そういうおばさん方の見目が変わってきて、「おや、あんた、大学でアイヌ語を教えているの」ということで、意識が変わってきました。以前のようなことは言わなくなりました。そして、少なからずアイヌ語をやりたいという人が出てきました。若い世代の中からも出てきています。しかし、余り急に進めてやる気をなくしてはしようがないということで、年寄りたちからそういう人たちに強くアイヌ

語を勧めることをとめられているので、私から「さあやろう」というように誘いかけてはいません。このようにアイヌ語に対する考え方が変わってきたのは事実です。

結局、この言語復興に対しては、もちろん各人が頑張るということも1つの要素ですが、もう1つは、社会的な地位、言葉に関する地位というものが保証されれば、自然とそれをやる人間が出てくるということです。だから、最も望ましいのは、アイヌ語が公用語の1つになることです。公用語になれば、各役所にアイヌ語を話せる人が必要になります。つまり、アイヌ語を話せる人材が各所で必要になるということが一番望ましいのですが、そこまでいなくても、例えば大学の講義でアイヌ語を教えるという1つの事実だけで状況は変わります。

こういったことに関して私は別な体験をしたことがあります。私がアイヌのことを始めた時のことですが、私の母親は泣きました。母親は和人です。「和人の私が産んだんだから、そんなこと言っ」ということで泣いたのですが、萱野さんが国会議員になってからそれが変わりました。また、新聞にアイヌに関する記事が結構記事に取り上げられますが、そういった形で社会的に認知されてくれば正直なもので、人の考えというものは変わっていくものです。そういうことで、周りアイヌを見る目というのは全然違ってきています。

アイヌ語の復興にかけては、もちろん各人に「努力しろよ」というのも1つですが、サポートの仕方として、例えば多くの大学に講座を開設する、あるいはアイヌ語の地位を高めるような催しを開くということが1つの契機になって、アイヌ語を学ぼうとする人が増えていくだろうという希望を持っています。

ラジオ講座についてですが、旭川では私の前に鹿田さんがやっていたが、その時どのような形で進めたのかは分かりませんが、私がラジオ講座引き受けた時に「みんなラジオ講座をやることになったので手伝って」と言うと、「嫌だ、ラジオなんか絶対出ない」と言われ、みんな嫌がっていました。私は英語とドイツ語、フランス語などと同じように、基本的な会話の文章を聞かせて、その次に文法の解説、そして再度会話を聞くという形で講座を進めました。この会話を最初に収録する時には、収録に加わってもらえない人がいました。その時は研究者の先生方に入ってもらい穴埋めをしました。それほど「ラジオ講座なんて、そんなもの」と言っていたのですが、それが変わってきて「出してくれ」とか「出演させてくれ」、「かっこいい」と言うようになってきました。

どうなのでしょう、今までのラジオ講座はかっよかったのでしょうか。不思議ではありますが、今の講座のやり方だとみんな喜んで、「ああやって会話の中であのせりふの部分で出るのがかっこいい」とか、「したら今度うちの孫も出してくれ」とかというような形で、今は出たいという人が多くなって困っています。「そんなみんな出していたら、会話にならないよ」という状態になっています。こういった部分でも雰囲気が変わってきました。アイヌ語の置かれている状況が絶望的なものではあること

に変わりありませんが、やり方1つで人の気持ちは変わっていくと思っています。このため、アイヌ語は無くなる、無くなると言われながら、このように21世紀になってもまだ残っていますのでこれからも残ってと思います。ラジオ講座の放送をこちらで聞くことはできませんが、インターネットでも聞くことができますので、ぜひ聞いてみてください。

アイヌ語の標準語については大学生にもよく言われます。他の地域との方言の違いを話しておかないと、他所では違う意味になる言葉、特に、日高の言葉との方言の違いで意味が反対になる言葉もあります。このことを知っておかなければ、まずいことになるので注意をしています。そうすると、「そんな通じない言葉を勉強してどうするの」と言われて困ったことがあります。この点についても、各アイヌ語教室を回って、少しずつですけれども横のつながりをつくりながら標準語化に向けて、みんなで細々ながらもやっけていこうと、地道にやっけていこうと思っています。例えば数の問題にしても、統一されなければまずいと思います。ここに集まっている皆さんの中にはアイヌ語を勉強されたことがある方もいると思いますが、旭川では非常に特殊な言い方をします。ここで1つとても不都合が生じます。例えば、みなさん「ホッ」といったら「20」だと勉強していますよね。そして、「ホッ」が「20」なのだから「ドホッ」といったら「40」ですよ。ところが旭川では「ホッ」が「20」まではいいのですけれども、「30」が「レホッ」、つまり「20」より上では「ホッ」が「10」を代表します。そういう使い方をするために、昔もこれで不都合があったようです。小沢カンシャツクという人は非常に先見の明のあった人で、いろいろな興行師をやっていました。その中でアイヌのサーカス団とか、アイヌのプロレス団なんかも作って各地を歩いていました。そこでは各地からアイヌを集めてやっていたのですが、当時はアイヌ語で商談というか、その契約の話もしていたようで、旭川方式では計算に不都合が生じるため小沢カンシャツクのメモ帳には標準的な他の地方の言い方が書かれていました。これでお互いに金銭で間違いのないよう、後から30円、40円でトラブルが起こらないように使っていたのだと思います。実際のところ、面で統一しなければ特に数字の面で非常に不都合が生じるということがあります。

私は、こういう話をするよりも、本当はずっと口承文芸をやっていたい方です。アイヌ語を始めたきっかけも、年寄りに口承文芸を聞いてもらって、喜んでもらうのがよくてアイヌ語をはじめました。

それで皆さん口承文芸がどのようなものか聞きたいですか。カムイユカラというかオイナがいいですか、トゥイタックがいいですか、それともユカラがいいですか、何か聞きたいのがあったら言ってください。何でもやります。

希望がないようですので、ユカラを語りしたいと思います。ユカラはとても長いので、全部はできませんけれども、一節をやってみたいと思います。

皆さん、ヘッチェを入れられる人はヘッチェを入れてください。いつもユカラを語る時には初めに日本語で内容を

話してその後アイヌ語で語るようにしていますので、今日もその方式でやります。

どのようにして生まれてきたもので

私があるのか、

毎日、刀の鞘彫り、宝物を彫るばかりして

暮らしていて、

トミサンベチ シヌタプカに1人で暮らしていたものだが、

ある日のこと、何者かが

私の住むチャシの上にシнтаをとめて、

こう言った

「おまえの兄さんが今、大変なことになっているから、

早く行って助けてやりなさいよ。」

お兄さんであるアイヌラックルは、

コタンコロカムイのところに、

宴会に無断で入り込んで、

そしてその妹に飲みさしを渡したけれども、

飲みさし「パケシ」といいますが、その飲みさし、このようなことをするのは結婚式の時だけですよね、例えば一つのお椀に入ったごはんを半分食べて相手に渡して、残りの半分を相手が食べると結婚成立になってしまいます。その妹にはポロシルンクルといういいなづけがいたのですが、そのようなことがあったため、そのポロシリ神は怒ってアイヌラックルに毒の針を飲ませて動けなくして、ウエクルセコタンというところへ送ってしまって、今は非常に不利な状況だから早く助けに行きなさいというところを語ってみたいと思います。

Nekon iki wa

par o kunip

sik o kunip

okay=an pe ne ya

kestoankor

tomika nuye

sirka nuye

patek an=ki kor

okay=an ike

Tomisampeci

Sinutapkata

yaykonisnu=an

kor okay=as wa

sine an to ta

neppampe

casi enka

kosinta atte

itak awe

ene oka i :

" Anokay anakne

Aynurakkur orwa

sonko an=korura wa

apkas=an pe

ne ru ne

Poyyampe

pirkano i=nu wa

i=korpare yan !

Ay=yupu-tonoke

Aynurakkur

kotankorkamuy

iku haw nu wa

yayahunke

kotankorkamuy

kottures

kopakes kor

kotankorkamuy

kottures anak

Porosirunkur

an=ereskakar kusu

iruska hine

upascironnup

irpakutar

kopawetenke

Okokko sake

surku sake

kure kusu

Aynurakkur

kamuyne an kur

iki p ne korka

hatcir

taporowano

Uekuruysekotan

an=korura wa

tane anakne

ay=yup-tonoke

wen kotom human"

Makankatkorpe

itak awe ne ya

yaynu=an kor :

" Anokay anakne

toytoy-aynu

an=ne kusu

somo hosipp=an

ruwe ne kusu

Poyyampe

orotunasno

ay=yup-tonoke

kasi=e=opas kusu

oman wa

i=korpare ya. "

sekor haw

hawkor kusu

taporo wano

homar

kamuykaw sirka

an=maw noyere

an=ehopuni

iki=an ayne

長いので、これくらいにします。(拍手)

続きが聞きたい方はぜひとも、としは冬に空知でやりたいと思っていますので、そちらに参加していただければと思います。ただし一応条件として、何か一芸、一芸といっても宴会芸ではなく、一応、アイヌの文化に関わる芸を1つということで、もちろんアイヌ語の替歌でも結構です。このアイヌ文化交流センターにも案内を出しますので、もしその案内を見ましたら、来ていただきたいと思います。特に若い人大歓迎です。別に年寄りを疎外しているわけではありませぬので、ぜひとも参加をしていただきたいと思っています。冬なので寒さは厳しいかも知れませんが、教会を借りることにしていますので大丈夫だと思います。その教会には「チキサニの大地」という本を出されて宮島さんという牧師さんがいます。宮島さんはアイヌのことをずっとやっている方です。

また、先ほど話しました辞書の件ですが、これから何回も改訂して出していきたいと考えていますので、新しい言葉について、現時点で旭川の言葉はわからないから何も出せないと言われるかもしれませんが、まず、最初の版が出た後でもいいので、何か新しい言葉ができればどんどん送っていただきたいと思っています。送っていただいても景品は出せませんが、採用されれば辞書に名前が残りますので、ぜひとも送っていただきたいと思っています。余裕ができれば新語大賞のような形で、ささやかでも1位の方にはプレゼントを渡すことができると考えています。あせらなくて結構です、これからもずっと空知や旭川で活動していきますので、末永く皆様よろしく願いをいたします。

特に、旭川には川村カ子トアイヌ記念館があるので行きやすいのですが、空知ではまだ整備されていません。地味でまだみんなに知られていません。これから何とかしていこうと思っています。キナラブックを初め、旭川出身の話者とされる人のほとんど空知出身です。その話者の語った物語の舞台にもやはり、この空知地方がかなり多く登場します。今語ったユカヲの舞台とされるトミサンベツ、シヌタブカという山城も、久保寺さんの書かれた本では、空知の横、新十津川の横の方にある浜益にこの英雄「ボンヤウンベ」の城があったとあります。その山城があったのはどの山かということについては、今はもう崩れてなくなるとか、あの山だとか、この山だという説がありますが、そういう舞台になった地です。空知に来て特に観光地として整備されているわけではありませぬので、何も見るところもないのですが、ユカヲやトゥイタクを1つ読んでから、その場所に行ってみて、ここがユカヲの舞台かと、「これがキナラブックのトゥイタクに出てきたテパウンナイ、ふんどしを洗う川か」とか、「これがラウネナイか」とかというところを見ていただければなと思います。というところで、時間ですので質問コーナーということにします。

〔司会〕 それでは、質問がございましたら伺います。

〔質問〕 太田さんのカムソッカイという名前の意味がどういうことか。

〔太田〕 太った男という意味です。見たままです。

〔質問〕 御自分でつけたのではなくて、先生の特長をみてつけられたのですか。

〔太田〕 そうですね。小さいころというか、今の特徴ですね、これは大学生のころからですから、かれこれ十何年か前から使っています。最近はこのようにいろいろなところに出るようになって、川村兼一さんから「おい、その名前、何とかした方がいいのではないか」と言われますが、十何年間使いたれた名前なので、今さら変えるのも何だと思えますので、何かがない限り使い続けようと思っています。

〔質問〕 もう一つ、話の中でさらっと言われたのですが、「ウエネウサラ」のことを詳しく教えてください。

〔太田〕 「ウエネウサラ」、互いに話をして楽しむという意味です。お楽しみの会ということです。最近間違った使い方をされていて、北海道のどこかの機関誌が「ウエネウサラ」としていて、その話を聞いて、「チャランケというのは、因縁をつけるという意味だそうですね、だからウエネウサラにしました。」と言うから、「ウエネウサラとは、そういうだべったり、無駄話することだよ」と言ったら、「えっ」って、「だけど、今さら直せないし」と言っていました。今のようにユカヲをしたり、踊ったりして楽しむおたのしみの会のことです。よくそれを間違って、会合の意味で使われたりしていますが、会合ではなくて、あくまでも娯楽主体です。大事な話だったら「ウエカラバ」とか、「ウコラムコロ」で相談し合うというような言い方になるのではないのでしょうか。

〔司会〕 それでは、時間になりましたので、1講目はこれで終了したいと思います。

太田先生にもう一度拍手をお願いいたします。